

【図7】「異録」（柳井市金屋小田家文書909） **自然現象③**

彗星・流星・日食と文書館資料(3)

《6. 「異録」》

「異録」(柳井市金屋小田家文書909)は、江戸時代、岩国藩の商都柳井津町(現柳井市)の豪商であった小田家に残された文書です。嘉永3～安政元年(1850～54)の柳井津ほか各地での出来事、大風、洪水、大地震等の自然災害、ペリー来航、将軍薨御、近隣神社の祭礼などさまざまな記事がみえます。その中に嘉永6年7月下旬、柳井津で目撃した彗星に関する記事があり、【図7】が描かれています(上写真)。

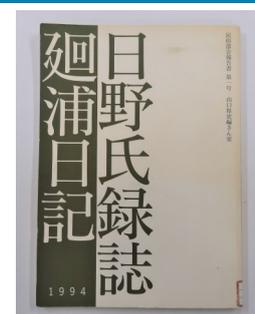
記事は「同(嘉永6年)七月廿四五日頃方西北二当りて珍しき星あらわれ候、常体之星ニ而上ニ気上り、俗ニ申尾之如し、当町を見当るに其氣凡二尺位イ、尤夜六ツ時方六半頃迄之内、夜々西ニより申候、凡六七日位も出テ其後無し」とあります。7月24～25日ころから西北の空に彗星が現れたこと、その尾が2尺ほど(約60cm)あり、6～7日間見えたことなど

が記されています、また、彗星の尾の明るさを「尤薄し」と記しています。この彗星は、ドイツ学者が発見したクインケルフェーズ彗星のようです(『近世天文史料』、「川崎市に残されていた天体現象の記録」『川崎市青少年科学館紀要』2018等)。

《7. 「元文後記」「宝暦後記」》

「元文後記」(多賀社文庫1197)は山口五社の一つ多賀社の神職家に残された多賀社文庫の1点であり、「宝暦後記」(安部家138)は山口町の有力町人安部家に伝来した文書の1点です。いずれも江戸時代の山口町を中心に各地の出来事を記す年代記です。伝来を異にするものの、江戸時代の山口町でこのような年代記が継続的に作成されていたことがわかる興味深い例です。天文現象関係記事は「元文後記」に1件、「宝暦後記」に5件確認できます。

「元文後記」延享4年(1747)7月27日条には、「七月廿七日夜五ツ時、火の



『日野氏録誌』

江戸時代、玖珂郡本郷村品秀寺の住職日野氏が記した山代地方(玖珂郡北部)の年代記です。元禄9～延享3年(1696～1746)のできごとを記しています。天文現象に関する記事は元禄9年2月に「旗星出ル」とあるのがもっとも古く、ほかに宝永4、同5、享保17、寛保3年にもみえます。山口県史編さん室民俗部会報告書第1号として刊行されています(1994年)。

玉飛」とあります。流星、それとも何かの自然現象だったのでしょうか。

「宝暦後記」明和6年7月条には、「七月比_レは_レき星(注一ほうき星)出現相成候、東方_レ始て、壱間計と見え申候所二、後程長く相成、[]ハツ時_レ明方迄見え申候、後程おそく出現、某事も七月廿六日見初申候、八月廿二三日比_レ見へ不申候事、或曰、いな星、五穀星、軍星など_レ色々御噂申候事」とあります。彗星は7月26日から約1ヶ月見えたこと、彗星出現を人々がさまざまに噂したことが記されています。また、「十月中比_レ西天に又は_レき星出現有之、暮六つ時_レ五ツ時迄、十月末より八見へ不申候」ともあり、彗星は10月後半に再び見えたようです。フランス人学者メシエが発見したこの彗星は、日本全国でも観測されており、『近世日本天文史料』に各地の記録が収録されています。

このほか、明和7年、同9年、安永2年に「異星出現」に関する記事、また、明和元年11月には「日輪」が京都で3つ、大坂で2つ出現したとの記事があります。

《8. 宇野家文書「風説書写」》

「風説書写」(宇野家文書12)は、江戸時代、萩藩熊本宰判下久原村(現岩国市周東)に居を構え、幕末期、近隣諸村の庄屋を務めた宇野家に残された文書です。この文書の中に、安政5年(1858)8月、ドナチ彗星を眼にした時のようすが記されています。ドナチ彗星はとても大きな彗星で、当時79才であった記主(名前の記載無し)は、「これまで自分は3度『掃木星(注一ほうき星)』を見たことがあるが、今回のような大きなものは初めて見

た」とその大きさに驚き、「古今の『珍星』だと世間で評判にしている」とも記しています。18C後期～19C中期に生きた79才の老人が、生涯で3度彗星を見たと述べているのも興味深い点です。

《9. 内田家文書「彗星之説」》

江戸時代後半、萩藩小郡宰判台道村(現防府市)の庄屋を務めた内田家の文書に「彗星之説」があります(内田家文書和漢174)。年欠(幕末期か)で記主も記されていませんが、その内容は、「去ル七月」、戊亥(西北)の方角に毎夜現れた「木曜星」を「豊年の吉星」とする考えを述べたものです(下写真・釈文参照)。

記主は、この星を「ほうき星」と呼んだり、「悪星」とみなすことは間違いだとし、陰陽師として名高い安倍晴明の時代のエピソードを紹介しています。かつてこの星が出現した際、人々が「悪星が出た」と嘆くと、晴明はそれを否定し、これは「吉星」であり、「この星を信じ、祭り奉るものは『大福長者』になること間違いなし」、「大吉星である」と力説したといえます。また、星に五穀(米・粟・稗・大豆・小豆)を戊亥の方角に向け捧げると良いこと、また、この星が出現する間は年々豊作で、特に火難・水難を逃れ、厄年にも少しも祟りがない、という話を紹介しています。

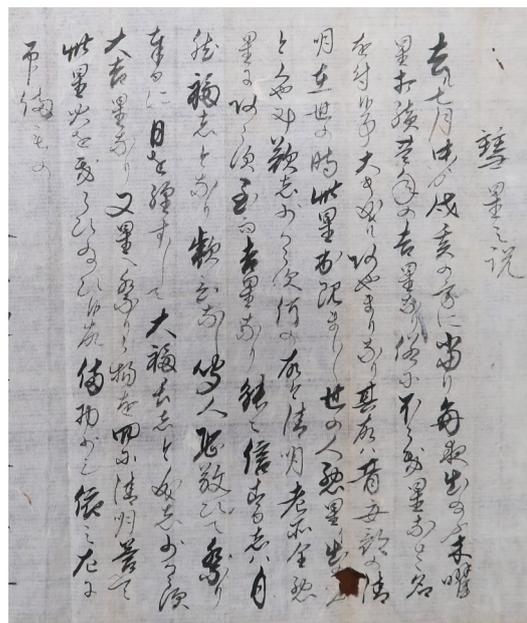
古来、彗星の出現は、凶兆(不吉なことのまえばれ)と捉えられることが多いのですが、一方でこのように吉事として理解されることもありました。吉凶いずれにせよ、ひとびとが彗星出現を天からの何らかのメッセージと理解しようとしていたことがよくわかります。

彗星之説

去ル七月中_レ戊亥の方_レに当り毎夜出給_レ木曜星打続、豊年の吉星なり、俗にほうき星など_レ名を付候事、大キ成ルあやまりなり、其故ハ昔安部の清明在世の時、此星出現まして、世の人悪星イ出給_レとくやみ歎者少からず、何の故ぞ、清明考所全悪星にあらず、至而吉星なり、能々信する者八百然福者となり疑ひなし、聞人恐敬ひて祭り奉るに、日を経ずして大福長者と成者少からず、大吉星なり、又星へ祭り候物を問ふ、清明答て、此星火をきらひ給ひ候故、備物少シ、依之左に印備もの、

一米 一粟 一稗 一大豆 一小豆

右の五こくヲ清浄にして戊亥の方_レに御備可被成候、尤此星出現の間八年々豊作二而、殊ニ火難・水難の災ひなし、仮令役年に当り候共、此星出現の内ハ少シもた_レりなし、別而戊亥御方ハ身の上_レに悦ひ少からず、信心し給ふへし、尤何の御年に限らず、御信心の御方、万端悪事も吉事と変シ、子孫長久の基、目出たし



「彗星之説」(部分)